

三国志・南京見聞記－呉を中心として－

小尾 孟夫

2008年9月から2011年6月までのほぼ3年間の南京滞在中に見聞したなかから、三国時代・呉に関連したものを紹介したい。3年間における三国志関係のビッグニュースとしては曹操墓の発見があった。2009年12月27日、日曜日、午前9時のテレビニュースで河南省安陽市西北の西高穴村で発掘された墓が紹介され、画面に釘付けになったことを思いだす。南京は、三国呉の都（建業）であったが、呉に関連した史跡は多いとはいえない。

南京市内の呉関連史跡には、石頭城、梅花山・孫権墓、清涼山・駐馬坡などがある。市街地の南郊外、江寧区には2005年に発見された上坊・孫呉墓があり、今までに発見された呉の100にもおよぶ墓葬のなかでは最大の規模であり、呉の宗室あるいは貴族の墓といわれる。南京市の南47キロ、長江をさかのぼった安徽省馬鞍山市には呉の朱然（1984年発見）、朱然の子の朱績（1996年発見）のものと推定される家族墓があり、朱然は、『三国志・呉書』に伝がある。これら二つの墓は発掘後現地に保存されている。ここでは南京市内の史跡を中心としてみていきたい。はじめに発掘報告書がでたばかりの呉の薛秋墓について現状を紹介したい。



2011年11月15日 TSS文化大学で講演する筆者

1. 薛秋墓の現状

2008年に南京に赴任してから、その年にでた発掘報告書「南京大光路孫呉薛秋墓発掘簡報」（『文物』2008年第3期）を目にし、早速、現地を訪問した。私は、遺跡の本来の姿、どのような場所にどのように存在していたかに非常に関心をもつ。一般的に発掘報告書は遺跡・遺物そのものの説明は当然のことながら詳細であるが、発掘地点や周囲の環境についてはきわめておまかせで、報告書の概略の地図をたよりに現地を訪ねるのは容易ではない。

薛秋墓は、2004年12月に南京市内の大光路の建設現場で発見され、南京市博物館考古部が緊急発掘をおこなった。報告書の地図をたよりに2008年11月に現地を訪れた。場所は、明代の南京城内の南東に位置し、現在の光華門（明代の宮城正面を南に走る御道街が南壁をつらぬく正陽門にあたる）の西にあたる。発掘から4年ほどたった現地には高層ビルが建設中であった。そのすぐ南に隣接する住宅地の守衛の人に場所を確認することができた。高層ビルの傍ら小さな通りを隔てた東隣はホテルである。

薛秋墓は、明の南京城壁南壁から少し北に離れたところにあり、南壁から北側に向かって傾斜地となって下がっている。この大光路に平行の南壁部分は、現在、南京城壁の中では撤去されたままになっているところである。したがって、薛秋墓跡地のそばの南北の通りを南に行くと城壁の跡地に続いてかなり幅のある「護城河」、堀にでる。堀に面した空き地は周辺の住民の菜園となっている。



写真1、発掘現場、高層ビルが建つ（筆者撮影以下同じ）

薛秋墓は、現在の地面から約3.2m下がったところから発見されている。この辺りは南側が高く北側に向かって傾斜地となっているので、元々丘陵地であったかもしれない。薛秋は、呉の都（建業）の南郊に墓を建てた。約1000年後の明代の城壁建造からはなんとか破壊を免れたが、それから約600年後の現代の都市開発からは逃れられなかったのである。

薛秋墓は、一つの墓室からなり天井がアーチ状になっており、煉瓦を積みかさねて作られている。墓室は長方形で長さが4.64 ㍍、幅が2 ㍍、高さが2.28 ㍍。珍しく盗掘されておらず出土器物が豊富で、男性と女性の木棺があった。薛秋夫婦の墓であろうか。三国魏晋時期のお墓からは木片の名刺がよく出土する（朱然墓からもでている）が、薛秋墓からもでている。それにより墓主が分かったのであるが、残念ながら薛秋については『三国志』には記載がない。しかしながら、今後、残された副葬品の研究により、呉の歴史がさらに明らかにされていくのではなかろうか。

以上は、やや専門に傾いた内容であったので、次に、南京市内の呉関連観光スポットとして比較的訪問する機会の多いと思われる史跡を紹介したい。

2. 石頭城

孫権の都は、最終的には建業（南京）に落ち着くが、城外の石頭山に軍事基地として石頭城を築いた。そこは戦国時代に楚国が置いた「金陵邑」の跡であったといわれるが、清涼山の西麓に位置し、天然の岩石を利用して築城している。清涼山の主要な岩石は赤い色の砂礫岩であり、唐以前の長江は山麓に迫っていた。西側の崖壁は長江の流れによってほぼ垂直に洗われて、紫がかった濃赤色の礫岩と砂岩が外に現れ、岩壁のでこぼこした表面が、獣面のように長江側に突き出たので、後世これを「鬼臉（きれん）」（鬼の顔）といい、石頭城はまたの名を「鬼臉城」という。現在の、石頭城遺跡公園でみるその城壁部分は明の南京城の西壁の一部でもあって明代の煉瓦で覆われている。



写真2、石頭城城壁の「鬼臉」

3. 清涼山・駐馬坡

駐馬坡（ちゅうばは）は、南京市内清涼山公園の東側斜面にあり、諸葛亮と孫権が馬を止めた場所とされるところで、「坡」は坂、坂道、傾斜面を意味する。「駐馬坂」とでもいえよう。言い伝えでは、後漢末、諸葛亮は劉備の命により呉と連合して魏に対抗した。かつて孫権と二人で馬に乗り、石頭山（現在の清涼山）一帯で秣陵（南京）の山川地勢を観察し、この地が理想的な政治・軍事の中心であることを察知したという。諸葛亮自身は一度も呉の都を訪れたことはないが、諸葛亮が呉と結んで魏に対抗したことを記念するために、後世、諸葛亮と孫権が馬を止めた場所を「駐馬坡」とし、清朝江寧知府の趙公任はかつて山麓に碑を立てている。「諸葛武侯駐馬処」と刻んだその碑は長年の戦乱をへて分からなくなったが、記録によると大体の場所は、清涼山公園の東大門を入ったところに位置したようである。



写真3、清涼山・駐馬坡

4. 梅花山・孫権墓

252年、孫権は71歳で亡くなり、鐘山（紫金山）南麓の小山に葬られたが、それが現在の明孝陵の南側にある梅花山（梅の名所）である。

明朝の創始者、朱元璋が自らの墓として「明の孝陵」を築こうとしたときに、その前にすでに孫権の墓があり、孝陵建設の責任者が孫権の墓を別の場所に移す必要があるか尋ねると、朱元璋は、「孫権もそれなりにりっぱな男であるから、自分の墓の門番をさせたらよい」と答えたので、孫権の墓はそのまま残され、そのために明孝陵にいたる墓道（神道）が孫権の墓のところで折れ曲がってぐるりと取り囲むようになったといわれる。梅花山東麓に「孫権故事園」（孫権物語園）が開設され、孫権の高さ3.5mの彫像が立っている。



写真4、梅花山



写真5、孫權像

おわりに

以上紹介したように南京市内において直接目に触れることのできる呉関連史跡は決して多くはない。呉の都、建業は南京市内の中心部、ビルの谷間の地下に埋もれている。呉に続く、東晋・南朝の都（建康）は、呉の都の上に重なっている。呉・東晋・南朝（宋・齊・梁・陳）、すなわち六朝の都をとらえるのはかなり難しい。南京を訪問する機会があれば、南京博物院や南京市博物館（朝天宮）を訪ねることをお勧めしたい。発掘された考古学上の成果を身近に見学することができるであろう。

参考文献：『南京六朝文化経典之旅』南京出版社、2008年12月

（本稿は、2011年11月15日にTSS文化大学で講演した内容の概要である。）